

# フレッシュアップ コミュニケーション

## 東京学芸大学附属竹早中学校同窓会

〒112-0002 東京都文京区小石川4-2-1 東京学芸大学附属竹早中学校内  
同窓会会長 古谷顯史郎

# '11.5

### ◆ご挨拶 会員の皆様へ◆



同窓会会長 古谷 顯史郎

同窓会会員の皆様には、益々ご健勝にて、ご活躍のことと存じます。

今年、桜の開花も間近という時期に、突如襲った東日本大震災。皆様方のご家族、ご親族、

ご友人の状況は如何でしょうか。竹早中学校でも影響を受けまして、卒業式は卒業生・父兄・学校関係者だけで行われる事となつてしまい、卒業生は若干さみしい思いをしたと存じます。震災後も被災は拡がり、原発事故による送電問題、世界環境にも重大な影響を与える可能性がある放射能汚染問題と続き、我が国は混乱、混乱の最中にあります。この危機を乗り越える為、我々日本国民一人一人が、不撓不屈の精神で、復興に向けて力強く日々一歩ずつ踏み出していかなければならないと思ひます。

また、第一期卒業生の担任であられました鈴木榮二先生がお亡くなりになりました。母校の創成期に教育制度改編、物資不足の中で大変ご苦労されたと、伺っております。加えまして、先生には長い間、母校及び同窓会を温かい目で見守り頂き、大変お世話になっておりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

本年は、三十三期の皆様のご協力を頂き、例年通り、七月九日(土)に母校の多目的ホールにて同窓会総会を開催する事になりました。特に新会員の皆様を会員一同大いに歓迎したいと思ひますので、多数の参加をお持ちしております。また、新会員名簿を発行致しますので、皆様の交友関係の充実、同期会開催等、有意義にお使い頂きたいと存じます。

話は変わりますが、今回、災害のテレビや新聞報道を見て、頭に

よぎった言葉があります。皆様も一度は聞いた事があると思いますが、物理学者で随筆家でもあった寺田寅彦の警句と言われている「天災は忘れたころにやってくる。」でした。また、先生の「日本人の自然観」の中に「西洋科学を輸入した現代日本人は西洋と日本とで自然の環境に著しい相違があることを無視し、従って従来の相地の学を蔑視して建てるべからざる所に人工を建設した。そうして克服し得たつもりでの自然の敵父のふるった鞭のひと打ちで、その建築物が実にいくじもなく壊滅する、それを眼前に見ながら自己の錯誤を悟らないでいる、といったような場合が近ごろ頻繁に起こるように思われる。」もあります。これからの復興のあり方に大いに関わって来る様な指摘だと思ひます。温故知新を今一度大事にして色々と考えてみたいと思っております。

この様な時にこそ、現役の生徒諸君には、益々、自由闊達さを忘れず希望を持って中学校生活を送ってもらい、将来、日本の新しい文明の担い手になって頂く事を期待して止みません。

終わりに、会員の皆様には、今後共、さらなるご支援ご鞭撻を願ひ申し上げます。

### 23年度同窓会総会のお知らせ

- 日 時／平成23年7月9日(土)  
午後1時半より受付開始
  - 【第一部 総 会】午後2時から午後2時半まで
  - 【第二部 懇親会】午後2時半から午後4時まで
  - 会 場／竹早中・小1階 ランチルーム
  - 会 費／一般 2,000円  
大・高校生 1,000円
  - ご招待／現・旧教職員の方々  
新会員 62期生(平成23年卒)
  - 催し物／講演会・演奏会
  - 総会担当幹事 第33期生(昭和57年卒)
  - 来年度担当幹事 第34期生(昭和58年卒)
- 第33期・34期生の方々は、お誘いあわせの上、是非ご出席ください。

ご出席・欠席を同封のがきにて、6月24日(金)までにご返信ください。

# これまでを顧みて、 これからの道のりを想う

学校長 渡辺 雅之



この度4月1日付で学校長として着任いたしました渡辺雅之と申します。同窓会会員の皆様におかれましては何かと母校のためにご尽力いただいておりますことに心からの感謝と御礼、そして敬意を表するものでございます。そして、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、小職着任前の3月11日に起こりました「東日本大震災」で被災されました方々、また、原発事故により避難を余儀なくされた方々に、一刻も早い復興と以前の生活が取り戻されますよう心から祈念申し上げます。これほどの大惨事に至るとは、東京に暮らす身としては、想像力の欠如を身につまされているところであります。自分にできることを考え、日々実践し続けることを課し、少しでもお役に立ちたい、と思っております。

小職は、高校生の時に教職への道を選び、それは自身が果たせなかったインター

ハイ出場を教師として達成すべく、卓球の科学的な指導を旗印に練習し、学ぶ大学生・大学院生活の後に訪れる教職生活を夢見ておりました。しかし、想像以上に卓球の成績が上がらず、それがためにスポーツ科学にのめり込んだことが今日までの大学での教員・研究生生活を継続させることになりました。この間、アトラクタオリンピックまで卓球の代表選手のコーチ、「障害者スポーツ」との出会い、健康づくりのための安全な運動・栄養・生活の指導と研究、ウルトラマラソン（100km走、24時間走等）の実践と大会主催、海外スポーツ交流味の素スタジアムにおける「難病」と取り組む仲間とともに「響け！万人の鼓動 ウォーク&ランフェスタ」開催と実に多くの経験をさせていただいて参りました。スポーツに関われたことが何よりの幸福でして、これには感謝する言葉すら見つからないほどであります。

そんな人間がこの竹早中学校に関われることは、これまでを顧みて、これからの道のりに、感謝という台車に夢や希望を載せて歩むことなんだ、と実感しています。教職員の皆様から多くの力をいただきながら、本校が目指す高い山に向けて歩を進めて参ります。

# 震災にも強い「竹早スピリット」

副校長 荒井 正剛



この度の大震災の際、本校では建物に被害はありませんでしたが、夜十時段階で167名の生徒が教室で泊まりました。「想定外」のこともいろいろ起きましたが、それを見事に克服したのが、教職員一丸となつての臨機応変の対応と、生徒と教職員の信頼関係でした。西原副校長は、出張先の大学から、自転車を買って学校に駆けつけました。フジモリパン屋さんはパンをたくさん提供してくださりました。おにぎりをたくさん差し入れてくださった保護者もいらっしゃいました。

神戸で被災された先生方が、「全ての場合を想定した機能的なマニュアルは不可能」で、防災マニュアルよりも、ふだんからの生徒と教職員の信頼関係こそ防災対策である、また、「災害に強い学校」とは「子どもたちが主人公として大切にされ」「自分の持ち味を発揮できる学校」「民主主義と自主性が尊重される職場のなかで教

職員がいきいきと働ける学校」であると話していらっしゃいます。これらは本校が大切にしてきた「竹早スピリット」で、このたいへんな局面を無事乗り越えられたのは、その伝統だと思います。また、本校にそういう雰囲気があるので、卒業生がよく来校するのだと思います。教師としてとても嬉しいことです。もっとも、話が弾んで、つい時間が経つのを忘れ、仕事が後回しになってしまうこともあります。

私は新入生に、中学校時代の友達は将来にわたって気軽に話せる親友になることが多いと話してきました。それは自分自身の経験からで、私の母校では、ワールドカップの年に同窓会を開き、皆、中学生気分に戻って話が盛り上がり、帰りはいつも終電です。皆様も同窓会総会にいらして、竹早での思い出で大いに盛り上がって頂きたいと存じます。

そんなすばらしい竹早を益々発展させることに貢献できますよう、副校長として、これまでの御恩返しのためにも、励んで参りたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

# 退任挨拶

## 竹早中学よ永遠に在れ

退任に寄せて

前学校長 山崎 謙介

早いもので学校長職の任期、三年が過ぎた。赴任当時歴史と伝統のある本校への期待は見えぬもの多しといえた。しかし、教育熱心な保護者に守られた品格のある学校であることはすぐに感じ取ることができた。とはいえ、生徒の皆さんの行いや所作がいかに弱々しく見えたことも事実である。事実、三年の間には生徒の皆さんの怪我や事故も少なからずあり、その都度さまざまな対処に追われた。時には生徒の間で生じるいくつかのトラブル、嫌がらせなどもあった。概して現代の子供たちが抱えている病的な側面も無かったわけではない。そのような中で、私の任務は生徒に対して如何に健全な誇りと自信を持たせるか、ということであった。したがって、およそ毎月一度の全校集会においては、時間にして五分程度の講話に全力を注いだといえる。

竹早中学は他の附属学校に比して、より伝統的であろうとしていることが特徴である。教育スタイルも良い意味でかなり保守的である。しかし、なんと言つても竹中の真骨頂は1、2年次の自由研究とそれに続く3年次の卒業研究であろう。いつの頃からこのようなスタイルが定着したのかは知らないが、これは優れた教育システムである。中には大学の卒業研究を凌ぐものが見られることは驚異的ださえある。このことを機に生徒諸君へのメッセージを以下の言葉で

与えてきた。すなわち、「幸せな人生を送るには三つの要素がある。一つは良き師を持つこと、次に良きパートナーを得ること、そして最後に良きテーマに出会うこと、である」と。

竹中のもう一つの良さは、儀式を大事にすることである。入学式、卒業式に代表されるように、良い意味で保守的なスタイルを頑なに守っている。これは卒業生の皆さんにとつて心に残るものだと思つている。悔やまれることは本年三月に東北・関東に発生した地震・津波の災害のため卒業式をきわめて質素に執り行わざるをえず、同窓会の皆さんのご参列が無い形で終わったことである。

最後に、竹早中学の卒業生は、社会の様々な分野で活躍しておられることも大きな特徴であり、またそれが豊かさの象徴であると思われる。芸術家あり、法曹界での人材あり、実業家あり、学問世界で活躍している人材ありである。このように豊かな竹中を去るにあたって、「願わくは竹中よ永遠に在れ」を祈りの言葉として残したい。

## 退任のご挨拶

前副校長 西原口 伸一

三月三十一日をもって、三十五年間勤務させていただきました竹早中学校を定年退職いたしました。教員としての原点を学ばせていただいた東京都昭島市立清泉中学校での二年間、また、一度教員生活をリセットする貴重な機会をいただきました附属小金井中学校での一年間、合わせて三十八年間の教員生活でした。先生方、生徒諸君、保護者の方々、同窓会・創竹会の方々には大変お世話になりました。皆様方のご理解とご協力をいただき、微力ながら技術教育の推進に、竹早中学校の発展に貢献できたものと思っております。

長かった教員生活を振り返りますと、様々な出来事が思い出されます。第一の思い出は、やはり「校舎改築」です。新校舎の改築は、旧校舎を半分近く取り壊して工事が進められましたので、授業は残された特別教室を半分は仕切つて行なわれました。当時の生徒諸君は、狭い教室・運動場もなく、遊び場もない最悪の環境の中で本当によく頑張ってくれました。今でも当時の生徒諸君には感謝しております。特に新しい校舎で一度も学ぶ機会なく、竣工直前に卒業していった51期生徒君、「有り難うございました」。

どのような学校を造るか、最終的に決定した教官会議はタイムリミット無しを条件に開かれました。会議は白熱し、終了したのはとくに0時を過ぎておりました。先生方の新校舎、新しい学校構想にかける「思い」は大変なものでした。その「思い」やエネルギーは今でも、引き継がれております。今後の竹中の発展をお祈りいたします。

私のこれからの人生ですが、仕事はいたしません。今後の時間は、九十三歳・八十三歳・八十一歳になる三人の親への孝行の時間に充てたいと思っております。

みなさん、長い間ありがとうございました。

## よき思い出

養護教諭 五十嵐 由美

振り返れば、公立から、附属竹早中学校に異動してきてから、あつと言う間に九年間が過ぎ、定年退職を迎えました。定年にいつかなると思っていました。最後の年として、保健委員も文研に参加しましたし、部活（華道茶道部卓球部）も楽しくできました。でも、ちよつと心残を感じました。もう少し、常勤という立場では

なく、自分自身が余裕を持つて、生徒と接してみたらと思ひ、非常勤で附属高校に勤務することになりました。まだ、これから非常勤としてやれることがわかつてくると思つてはいるのですが、新しいことをやっているとすることが人生のハリになつてはいると思つてはいます。

附属竹早中学校としての特徴ある運動会や文研、校外学習などがありますが、生徒のよき思い出になつてはいるようですが、学校から去つた私にもよき思い出になつてはいます。学校の特徴をこれからも繁栄して行つてください。お世話になりました。

## 第2の我が家

保健体育科 加藤 英明

竹早中には、二十四年間勤務することができました。途中、小中学校の全面改築があり、約二年間は活動場所が大幅に制限されてはいましたが、授業は文京区体育館と小石川運動場、部活は他区の体育館へ移動して行いました。また、屋上に防球ネットを張つてもらひ、狭い場所で大変苦勞して授業や部活動を行つたこともあります。今思えば、大変な毎日でしたが、充実した忘れられぬ日々として記憶に焼き付いてはいます。

建物も体育館も校庭も大変使いやすくなり、制服も新しくなりました。外見は全く変わりましたが、変わらぬものが一つあると思ひます。それは、生徒同士、先生と生徒、そして先生同志の仲の良い関係です。言わば、竹早中は「アットホーム」な学校なんです。

このような素晴らしい人間関係の学校、過ごしやすい職場に長年勤められたことに心から感謝してはいます。皆さん、本当にありがとうございました。

# 震災からの復興のために 僕らに出来る事は

## 一人の在独邦人として

33期生 オペラ歌手  
東京音楽大学客員准教授

小森 輝彦

僕がドイツに来たのは、思えばちょうど阪神大震災が起こった年だった。それからずっとドイツで暮らしているわけだが、この16年間で今回の東日本大震災ほど、日本とドイツの距離を強く意識したことはなかった。今はこの16年前の震災を今回の震災の様に深く受けとめられなかった事を恥ずかしく思う気持ちもある。

文化庁芸術家在外派遣研修員として2年間ベルリンに派遣され、その後2000年にテューリンゲン州のアルテンブルク市・ゲラ市立劇場と契約を結び、現在までこの劇場で専属第一バリトンソリストとして歌っているので、もうこの町に来て11年が経つ事になる。

最初は「また地震があったのか・・・」と思っただけだった。オペラ「ヘンゼルと

グレーテル」の本番直前に、舞台上で小道具のチェックをしている時、同僚から聞かされて大きな地震があったと知ったのだが、そのあとニュースを見て愕然とした。東京の家族に電話をしても全く通じない。メールで連絡を試みた。

とりあえず家族の無事は確認できた。しかし落ち着かず、ニュースから目が離せなくなってしまう。もう見たくないと思っただけでもニュースサイトを開いてしまう。時差があるので、夜寝る頃には動き始めた日本の朝のニュースがどんどん入ってくる。心細くなりながら見続けるのを諦めてベッドに入り、翌日起きるとまず、本場にわなわなしながらまたニュースサイトを開く。毎朝この瞬間に考えていたことは「自分がこのうとうと睡眠を取っている間

に、日本がダメになっただろう」と言うことだった。

友人や同僚に「家族も友達も無事なのは何を心配する必要があるの？」

「日本から離れたところにおいて良かったでしょ」と言われて顔から血の気が引くほど腹が立った。どうしてそんな事を聞くんだらう？良かったわけがないのに。でも彼らが僕らが無事であることを喜んでくれているのも受けとめるべき事実なのだ。

この辺でだんだんわかつてきたのだが、僕には罪悪感があるのだ。震災の被災者の皆さんのことを考えると口に出すのを



ティノ・ツイッベル

憚るのだが、僕は自分が無事だった事を素直に喜べない。これはほとんどのドイツ人には理解できない感情であるらしい。そして自分が当事者なのか当事者じゃないのかもわからないのに、自分がこれだけ、文字通り「揺さぶられて」いる事で、相当参っているらしかった。直接被災したわけではないにもかかわらず、この未曾有の大惨事に完全に飲み込まれてもがいていた。

被災した方々、被災者を心配するその家族、東京に住む多くの友人、関西地方に住む友人たち、そして我々外国ぐらしの日本人。同じ日本人でもそれぞれ違う場所、地理的にも心理的にも違う距離でこの震災に揺さぶられている。でも、みんな当事者だといまは思う。「日本」が痛めつけられたのだ。「日本」を抱える人はみんな当事者なのだ。

この事がわかった時、やっと僕にとっての「震災」へのアクションが始まった。揺さぶられ続けて、ほとんど麻痺状態、あるいは硬直状態だった体に、だんだん血の気が戻ってくるのを感じた。そして自分が如何に日本を愛おしく思っているか、日本人である事を誇りに思っているかに気付かされた。



ティノ・ツィッペル

自分に何が出来るのか、何をすべきなのか・・・。

この頃、だんだんパニックを起ささない日本人に対する欧米諸国の感嘆の聲が上がり始めた。日本にいる皆もそれが日本人の美点だという事に勇気を持ったように思えた。僕自身も大きな勇気をもたらした。日本、ちゃんと頑張ってる。

チャリティーコンサートの企画を進めた。自分に出来る事は、やはり音楽家としての復興のサポートをすることだ。僕の所属する劇場は無償でホールを提供してくれ、劇場後援会も協力を約束してくれた。僕の頭にすぐ浮かんだのは、僕の親友であり日本人の父を持つブラジル人テノール、リカルド・タムラ氏とのオペラ・プログラムだった。彼は二つ返事で出演を了承してくれ、劇場の同僚である日本人ピアニストの長崎貴洋さんがピアノ伴奏を引き受けてくれた。

このチャリティーコンサートは話題を集め、また同時期に僕がドイツの宮廷歌手(Kammersänger)という称号を授与されたことも重なって、多くのプレスに取材を受けたが、今までになく重い責任を感じた。この土地では日本人の代表として取材を受けることになるわけだから、それに恥じない態度で対応しなければならぬ。

本番は予想を大幅に上回る盛況となり、大成功に終わった。当初は1000人程度の来場者予想でコンサートホールのフォアイエでの開催を計画していたのだが、前売

りが2000枚を超えてコンサートホールに場所を移し、当日はチケット売り場に長蛇の列ができて来場者は4000人を超えた。プログラムはイタリアオペラの名曲を集めた「珠玉のオペラ」といった趣向のもので、アンコールの最後はリカルドの希望で、美空ひばりさんの「川の流れのように」を一人で歌った。善意が集まったホールの雰囲気はこの上なくポジティブなもので僕らの演奏にも自然に熱が入り、終盤では曲ごとにスタンディングオベーションとなった。劇場に勤めて31年のチェリストの同僚が「この劇場で体験したコンサートの中で最高だった」と言ってくれたが、客席の善意が演奏会の空気を別の次元に引き上げてくれたのだと思う。

今回の災害とは関係なく、僕の劇場人としての規律の一つに「瓦礫の上にこそ劇場を」というのがある。無論さしせまった危険が去ってからの話だが、文化や娯楽は困難の中でこそ必要だし、勇気、慰めをもたらすものだ。

仙台フィルハーモニー管弦楽団の「音楽による復興センター事業」は僕らのこの思いを体現してくれている。また社団法人日本クラシック音楽事業協会は被災地の学校の壊れた楽器の補充などを計画してくれているとのこと。入場料の他、個人やゲラ市役所職員組合、アルテンプルク市立歌劇場後援会などの寄付など、集まった義援金は8000ユーロを超えた。義援金はこの二つの団体に送るつもりだ。

アンコールの前の挨拶で、集まってくれたお客様にお願いしたことは、どうか長い目で日本の復興を見届けて欲しいと言う事だ。合併された劇場がある近郊のアルテンプルク市でもチャリティーコンサート開催の問い合わせがあり、これからもチャリティーの活動は続けていくつもりで、それでも継続的な復興活動への協力を呼びかけていきたいと思っている。

復興にかかる時間は多分僕らの想像以上に長くなるだろう。物質的な復興だけでなく、精神的な部分も含めて痛みが癒えるにはさらに時間がかかると思う。

チャリティーコンサートの報道でも言及されたが、危機とそれに立ち向かう協力を通じて新たな友情が生まれた事に、僕は希望を見いだしたい。ゲラというドイツの片田舎の町でこんなに日本のことを思ってくれる人がいて、みんな思いを形にしてくれたのだ。

そして、これは僕だけの思いではないと思うが、日本という国に対して、日本人であることに対して、愛情や誇りを新たにし、復興への決意を新たにしたい事がある。すれば、ここにも希望の灯はともっている。16年前の震災は深いところで受けとめられなかった自分が今回これだけ揺さぶられたのは、社会との関わり方が変化した事にも関わりがあると思う。16年暮らした第二の故郷ドイツと生まれ故郷の日本、両方の社会と責任を持って関わる使命感を、この希望と共に持ち続けていきたい。

# 平成22年度同窓会総会報告

32期幹事 井口 眞美

「私たちができるの？そもそも幹事学年が何人集まれるのかしら？」

平成22年度の幹事学年である、第32期の数人が集まりスタートした準備会。見通しがもてず不安も多くありましたが、徐々に幹事会のメンバーも増え、楽しく準備を



進めることができました。また、互いに連絡を取り合い、同期の仲間の所在をかなり確認できたことは大きな収穫でした。

総会当日は、お世話になった先生方にもご出席いただいた他、114名の方々の参加をいただきました。お天気もよく、終始和やかな雰囲気です。アットホームな竹早らしい総会を行うことができたので



はないかと思つています。(ちよつと経費を節減しすぎて、皆様へのサービスが十分でなかったかも…との反省は残りますが、お許しください！)

総会後には、同期のメンバーから「幹事ご苦労さま」「仲間たちから、いい刺激をもらいました。楽しかったです」といったねぎらいのメールをもらう等、竹早の絆を再確認した次第です。

総会が無事終了できましたこと、常務理事の方々を始め、皆様のご協力に御礼申し上げます。

写真すべて／平成22年度総会より



## 故鈴木榮二先生 追悼

六十余年のお付き合い

鈴木榮二先生を悼む

1期生 小川 壽夫

鈴木榮二先生の訃報が入ったのは、今年の元旦であった。「えっ」という驚きが頭の中を走った。われわれ一期生は、毎年、誰かが先生と接していたから、またいつでも会えるものと思ひ込んでいたのだ。

思えば六十余年、長い長いお付き合いであった。これだけ深い師弟関係というのも、そうないのではない。大学に入り就職し熟年に達する。一人一人の成長・行動をずっと見守ってきた。死まで見届けてもらった者もいる(大場秀夫君のご逝去を悼悼する「同窓会報平成二十一年」)。われわれ仲間うちでは「エイジ、エイジ」と呼んでいた。友だちのような感覚である。わたし自身家庭教師先を紹介していただき、その縁で出版社に就職し満足する仕事をする事ができた。わたしの現在あるのは先生のおかげである。

先生はよく、附属中学の教育方針を立てるのにいかに苦労したか、力をこめて語られた。われわれは「またか」という顔をして聞いていたが、これは大変失礼なことであった。六三制の発表は教育改革の中心にあり、いわば戦後民主主義の根幹を担っている。そして当時の教育現場に混乱がなかったわけではない。

どうも一期生は特別にいい思いをしたようだ。上級生がいなくて自由奔放に駆け回り遊びまくった。みな仲が良かったし、今でも会えば気楽に話ができる。最期に先生は、葬儀はどうしてもわが同級の生家「西信寺」で、と言ひ残された。享年九十二。戒名詠情院高覚教榮居士。

平成23年度 予算案 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

平成22年度 会計報告 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

| 収入の部 (円)   |            | 支出の部 (円)     |            |
|------------|------------|--------------|------------|
| I 前年度繰越    | 9,469,120  | Ⅲ 本年度支出      | 5,955,000  |
| 【内 訳】      |            | 【内 訳】        |            |
| 定期預金       | 3,000,000  | 同窓会会報発行費(1)  | 1,310,000  |
| 普通預金       | 1,528,194  | 総会・懇親会開催     | 500,000    |
| 郵便貯金       | 4,798,329  | 常務理事会費       | 40,000     |
| 小口現金       | 142,597    | 総務費          | 50,000     |
|            |            | 文書事務費        | 40,000     |
|            |            | 郵便連絡費        | 90,000     |
|            |            | 慶弔費          | 90,000     |
|            |            | 卒業記念品代       | 135,000    |
| Ⅱ 本年度収入    | 3,245,000  | クラブ活動援助金     | 400,000    |
| 【内 訳】      |            | 名簿作成費        | 3,000,000  |
| 新入会員会費     | 1,650,000  | 名簿修正・追録費     | 100,000    |
| 同窓会活動支援寄付金 | 500,000    | ホームページ作成・維持費 | 200,000    |
| 維持会費       | 800,000    |              |            |
| 総会・懇親会会費   | 90,000     | 差引残高         | 6,759,120  |
| 預金利息       | 5,000      | Ⅳ 次年度繰越      | 6,759,120  |
| 名簿売上       | 200,000    | 【内 訳】        |            |
|            |            | 定期預金         | 3,000,000  |
|            |            | 普通預金         | 700,000    |
|            |            | 郵便貯金         | 3,000,000  |
|            |            | 小口現金         | 59,120     |
| 合計         | 12,714,120 | 合計           | 12,714,120 |

| 収入の部 (円)   |            | 支出の部 (円)     |            |
|------------|------------|--------------|------------|
| I 前年度繰越    | 8,516,808  | Ⅲ 本年度支出      | 2,664,207  |
| 【内 訳】      |            | 【内 訳】        |            |
| 定期預金       | 3,000,000  | 同窓会会報発行費(1)  | 1,300,950  |
| 普通預金       | 30,365     | 総会・懇親会開催費    | 396,134    |
| 郵便貯金       | 5,003,787  | 常務理事会費       | 29,180     |
| 小口現金       | 482,656    | 総務費          | 33,000     |
|            |            | 文書事務費        | 35,745     |
|            |            | 郵便連絡費        | 81,300     |
|            |            | 慶弔費          | 71,500     |
|            |            | 卒業記念品代       | 135,000    |
| Ⅱ 本年度収入    | 3,616,519  | クラブ活動援助金     | 400,000    |
| 【内 訳】      |            | 名簿修正・追録費     | 14,448     |
| 新入会員会費     | 1,660,000  | ホームページ作成・維持費 | 166,950    |
| 同窓会活動支援寄付金 | 626,000    |              |            |
| 維持会費       | 1,088,900  | 差引残高         | 9,469,120  |
| 総会・懇親会会費   | 205,000    | Ⅳ 次年度繰越      | 9,469,120  |
| 預金利息       | 5,619      | 【内 訳】        |            |
| 名簿売上       | 31,000     | 定期預金         | 3,000,000  |
|            |            | 普通預金         | 1,528,194  |
|            |            | 郵便貯金         | 4,798,329  |
|            |            | 小口現金         | 142,597    |
| 合計         | 12,133,327 | 合計           | 12,133,327 |

注：(1)送料を含む

6年間にわたり取り組んでまいりました校舎の空調設備は昨年夏直前に設置を完了し、昨夏の猛暑に対応できたことに安堵いたしました。残念ながら今夏は厳しい節電が求められる中で十分に機能できない可能性が大であります。しかし、必ずしも膨大なエネルギーを消費して涼しい環境で勉強することが生徒にとって最良の教育とも考えられません。もちろん節電を求められる原因は誠に不幸なことではあります。

創竹会は国立大学の法人化に伴い、附属中学校への国からの予算が減少する中で従来に変わらぬ教育環境を維持してゆく為の仕組みとして2001年1月に発足し10年を経過致しました。附属竹早中学校在校生の保護者の皆様を正会員とし、同窓会の皆様、正会員OB並びに、退職された先生方を賛助会員として、年間約250万円の会費・寄付を頂き奨学寄付金、並びに教育研究活動補助金として母校に提供し、竹早中学校の教育・研究活動に貢献しております。

このたびの東日本大震災に被災された方には衷心よりお見舞い申し上げます。余震がおさまらず、また地震・津波被害の復興も、福島原発収束も見通しの得られない状況であります。皆様の御無事を心より願っております。

同窓会会員の皆様には平素より竹早中学校教育後援会、創竹会の活動にご理解とご協力を賜りありがとうございます。



創竹会会長 子安 龍太郎

## 創竹会からのご挨拶

はじめまして。今年度、附属高校から異動して参りました養護教諭の塚越潤です。中学校に勤務するのは初めてで緊張に満ちた毎日ですが、中学生の柔らかな心と体を大切にしつつ、一人ひとりの成長を支えることができたらと思います。校章にもなっている泰山木はとても好きな木です。竹早中学校の生徒の皆さんが泰山木のように伸びやかに空に向かっていくのを見守れることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。

空に向かう  
塚越 潤

平成23年4月1日私は「東京学芸大学附属竹早中学校」に赴任しました。教科は「保健体育」を担当しています。学級では、1年B組の担任として、部活動では、陸上競技部と水泳部の顧問をしています。竹早中学校に赴任して、約1ヶ月が経ちましたが、先生方や職員の方をはじめ多くの生徒のみさんから声をかけてもらい、充実した日々を過ごしています。これから、どうぞよろしくお願いたします。

東京学芸大学附属  
竹早中学校に赴任して  
大熊 誠二

## 新任挨拶

これを質実剛健の気風を助成する機会ととらえた教育をお願いしたいものと考えます。一方、国家財政は今後、震災復旧のためにさらに緊迫することとなり、その影響は国立大学附属中学の運営にも及んでくること予想されます。創竹会の役割が一層重要性を増すものとなりますので、同窓会の皆様のこれまで以上のご理解と財政面でのご支援を心よりお願い申し上げます。

## ◆名簿部より◆

### ◆2011年版 同窓会名簿の作成について

2010年より各年次委員にご協力賜り、同窓会会員について調査を行い、データの更新を行いました。年次委員の皆様には、感謝を申し上げますと共に、今後とも同窓会活動にご理解ご協力を頂きますようお願い致します。

### ◆デジタルデータ更新について

①「竹早中学校同窓会個人情報に関するガイドライン」及び「竹早中学校同窓会個人情報保護基本方針」を遵守し、管理致します。

②同窓会誌「フレッシュアップ」発行時の同窓会総会返信葉書にて、毎年調査を行い更新致します。

③次の場合にはデータ提供をいただき、更新致します。

- ・自分の住所等の変更があった時
- ・2011年版名簿に記載誤りがある時
- ・友人の空欄(消息不明)をお知らせいただける時のみの管理となります。

※ご本人が掲載拒否を希望されている場合は同窓会

連絡先：〒112-0002  
東京都文京区小石川4-2-1  
東京学芸大学附属竹早中学校  
同窓会名簿部 白石 英行宛  
E-MAIL: bunkyo@mail.ne.jp

※同窓会名簿の最後に葉書を折り込みましたのでご利用下さい。

④デジタルデータ更新は年2回(3月・9月)行います。

### ◆最新情報の提供について

同期会開催の必要に応じて各年次委員に限定し提供致しますので、名簿部 白石 英行までお問い合わせ下さい。

### ◆2011年版 同窓会名簿の販売について

①2011年同窓会総会の会場にて販売を致します。

②同封の振り込み用紙にて、お申し込み頂けます。

維持会費2000円 + 名簿購入費 5000円  
(送料込み)  
※2011年同窓会総会開催後、順次発送となりますのでご了承下さい。

## ◆常務理事 選出のお願い◆

同窓会理事会は、常務理事の募集をしております。理事会名簿でもご覧頂ける様に様々な年代の方々が、色々な部会で、活躍しております。

同窓生の一番の宝は、「共に学んだ友」と「帰って来られる母校」の二つです。同窓による二種の共通の価値観を持っていると思われる様々な年代、キャリアの方々との語らひは、刺激的で且つ興味深く、是非同窓会の活動にご参加下さい。

新しい事に一歩踏み込まれてはいたかがですか?ご参加を、いつでもお待ちしております。

## ◆平成22年度同窓会活動状況◆

- 4月8日(木) 入学式出席 古谷会長 祝い金1万円
- 6月4日(金) 先生方との懇親会
- 6月5日(土) 常務理事会①
- 7月10日(土) 同窓会総会 於ランチルーム
- 9月30日(木) 運動会 古谷会長他 祝い金1万円
- 10月23日(土) 常務理事会②
- 1月29日(土) 新年会 総会担当幹事慰労会
- 2月26日(土) 常務理事会③
- 3月18日(金) 卒業式

## ◆同窓会常務理事会名簿◆

- 顧問 二瓶好正(7)、田中元次(2竹)
- 監事 高柳良夫(3竹)
- 会長 古谷顯史郎(13)
- 副会長 三嶋明(13)、松岡隆司(14)
- 総務部 高島正子(7)、白江千治(26)
- 事業部 高柳良夫(3竹)、三嶋明(13) 田中充(29)
- 広報部 小菅昭彦(27)、田上睦深(33) 野島雅(41)
- 名簿部 花見喜久子(13)、白石英行(31) 正野敬子(19)、永井真知子(19) 石黒由香里(26)
- 会計部

## ◆母校PTAの文化厚生部からのごお願い◆

例年行われている制服等のリサイクルを左記の要領で行います。ご協力下さい。

○現行の制服(男女共)、Yシャツ、ブラウス、ネクタイ、リボン、ベストなど。

○運動会(9/24)、同窓会総文研当日(11/4・5)も受け付けます。運動会では下校庭へ行く階段下に回収箱を設置します。

○竹早中学校事務室宛の郵送・宅配でもお申し込みします。

## ◆会計部より◆

同窓会維持会費をすでに複数年お納め頂いている方が多数いらっしゃいますが、事務処理上その方々にも会費納入書が一括して発送されてしまいます。誤って納入された場合には会計係までお申し出下さい。

## ◆維持会費・同窓会支援寄付金のご協力のごお願い◆

同窓会経費は、入会金、維持会費、寄付金その他の収入金をもってこれにあてて(同窓会会則第22条)。22年度の支出は二六六万円、収入は三三二万円でした。(22年度会計報告参照) 収入内訳は、入会金二六六万円、維持会費一〇八万円、寄付金八二万円、その他二五万円でした。維持会費は、卒業後7年以降経過した社会人を対象にしています。維持会費は毎年2000円です。同封の払込取扱票をご利用下さい。払込人住所氏名欄の住所氏名・卒業期の記入をお忘れなく。(毎年払込み下さい)

## ◆編集後記◆

三月の東日本大震災では、本当に多くの方々が犠牲となりました。愛する肉親や友人を失った悲しみはいかばかりかと胸が痛みます。その混乱の最中、母校では何とか卒業式を執り行うことができました。六十二期生達はこの逆境を乗り越え、たくましく成長していつてくれると確信しています。

さて、私事で恐縮ですが、丁度この原稿を書き上げた五月上旬、二十七期の同級生の一人が闘病の末、亡くなりました。享年五十歳でした。私にとっては小・中の多感な九年間、竹早の地で共に過ごした仲間であり、初恋の人でもありました。心からご冥福をお祈りしたいと思います。

(小菅)

同窓会ホームページをご活用ください。

<http://www.takehaya-jhs-dousoukai.net/>





